

見上げるお方は主おひとり

2006. 10. 29 (日)

吉祥寺・福音集会にて
ベック兄メッセージ (メモ)

引用聖句

出エジプト記 20章1節から6節

それから神はこれらのことばを、ことごとく告げて仰せられた。「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である。あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があつてはならない。あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、どんな形をも造ってはならない。それらを拜んではならない。それらに仕えてはならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神、わたしを憎む者には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである。」

マタイの福音書 5章17節から20節

「わたしが来たのは律法や預言者を廃棄するためだと思つてはなりません。廃棄するためではなく、成就するために来たのです。まことに、あなたがたに告げます。天地が滅びうせない限り、律法の中の一点一画でも決してすたれることはありません。全部が成就されます。だから、戒めのうち最も小さいものの一つでも、これを破ったり、また破るように人に教えたりする者は、天の御国で、最も小さい者と呼ばれます。しかし、それを守り、また守るように教える者は、天の御国で、偉大な者と呼ばれます。まことに、あなたがたに告げます。もしあなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさるものでないなら、あなたがたは決して天の御国に、はいれません。」

マタイの福音書 5章28節

「しかし、わたしはあなたがたに言います。だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。」

マタイの福音書 5章31、32節

「また『だれでも、妻を離別する者は、妻に離婚状を与えよ。』とされています。しかし、わたしはあなたがたに言います。だれであっても、不貞以外の理由で妻を離別する者は、妻に姦淫を犯させるのです。また、だれでも、離別された女と結婚すれば、姦淫を犯すのです。」

マタイの福音書 5章43、44節

「『自分の隣人を愛し、自分の敵を憎め。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。」

ローマ人への手紙 7章1節から6節

それとも、兄弟たち。あなたがたは、律法が人に対して権限を持つのは、その人の生きている期間だけだ、ということを知らないのですか。— 私は律法を知っている人々に言っているのです。一夫のある女は、夫が生きている間は、律法によって夫に結ばれています。しかし、夫が死ねば、夫に関する律法から解放されます。ですから、夫が生きている間に他の男に行けば、姦淫の女と呼ばれるのですが、夫が死ねば、律法から解放されており、たとえ他の男に行っても、姦淫の女ではありません。私の兄弟たちよ。それと同じように、あなたがたも、キリストのからだによって、律法に対しては死んでいるのです。それは、あなたがたが他の人、すなわち死者の中からよみがえった方と結ばれて、神のために実を結ぶようになるためです。私たちが肉にあったときは、律法による数々の罪の欲情が私たちのからだの中に働いていて、死のために実を結びました。しかし、今は、私たちは自分を捕えていた律法に対して死んだので、それから解放され、その結果、古い文字にはよらず、新しい御霊によって仕えているのです。

ローマ人への手紙 7章18節から20節

私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。もし私が自分でしたくないことをしているのであれば、それを行なっているのは、もはや私ではなくて、私のうちに住む罪です。

ローマ人への手紙 7章24、25節

私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。ですから、この私は、心では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えているのです。

今朝付けようと思った題名は、「掟の支配からの解放」であると思ったのですが、今、一緒に歌いました歌の中のことばのほうがよいと思いました。

『見上げるお方はただイエスおひとり』、このほうがずっとよいのではないのでしょうか。

私たち、すなわちイエス様を受け入れた者は、今日まで過ごしてきた時を振り返ると、おそらく次のように言えるのではないのでしょうか。

「長い間、主なる神なく、望みなくさまよって、何のために生きているのか訳が分からなかった。心中には満足がなかった。望みはただ地上のものに置かれ、自分の願いが叶えられたらそれを無上の幸福としていた」と。

このようなとき、主なる神の御子である主イエス様が、全人類のために成し遂げられた御救いのことを聞きました。これはまさに驚くべき知らせでした。そのうちだんだん自分

が救われたい罪人であり、罪のうちに死んでいる者であり、どうしても身代わりに死んでくださった神の御子である主イエス様の救いを受け入れなければならないことを、知るようになってきました。

そして、「イエス様。私は滅びなければならない罪人です。あなたは聖なるお方です。願わくば、御子イエス様の血によって私の罪を赦し、お救いください」と祈り、イエス様を心のうちにお迎えするようになるまで、激しい心の戦いがあったのではないかと思います。

けれど、イエス様を受け入れた後は、喜びと平安に満たされた幸いな生涯を知るようになり、そのうちに、私たちは自分の罪は赦されたけれど、自分のうちには依然として罪が残っていて、いつもいつも同じ罪を犯してしまうということに気付かされたと思います。

イエス様は、私たちの罪のために死なれたばかりでなく、私たち罪人のために死なれた。私たちの罪が消し去られたばかりではなく、私たち自身も、古き人はイエス様とともに十字架につけられてしまった。私はキリストとともに十字架につけられてしまったのだ、とこれが分かったとき、このことは忘れることができない一つの大きな経験となったと思います。そして、自分はキリストとともに死に、キリストとともによみがえらされたという驚くべき知識が、続いて自分のものとなってきたと思います。また同時に、自分はもうすでに自分のものではなく、尊い血潮で贖われたから主のものとなった。私は永久的に主のものとなり、そしてその結果は、全身全霊を主イエス様にささげ、イエス様におゆだねするように導かれたと思います。私たちの大部分の人たちは、このように信仰の道を進んで来たのではないのでしょうか。

「主イエス様は、こんな私たちのために、驚くべき救いのみわざを成してくださり、私はイエス様のために尽くしたい」という願いが湧いてきたでしょう。また、そのことはさらにあれやこれやを成すことではなく、イエス様のみこころを尋ね求めて、それに従うことを望むようになったと思います。

本当の意味での「献身者」とは、主のみこころを成す人です。イエス様と同じように、「私の思いではなく、あなたのみこころが成りますように」と願う人、また、イエス様の母であるマリヤのように、「みことばのとおりになりますように」と願う人が、主の用いられる人です。

けれど、何をするにも主のみこころにかないたいと願っているにも関わらず、なお、自分の心のどこかに、それを留めようとする何ものかが潜んでいることに気が付き始めます。それを発見した時、今までの経験を疑い始めるようになり、「はたして、自分がイエス様とともに十字架につけられたというあのことは、間違いだったのではないのでしょうか。いや、確かにあれは聖書の言っていることですから間違いはない。それでは、イエス様にすべてを明け渡さなかったのでしょうか」と疑います。

しかし、確かに自分の生涯をイエス様に明け渡したもののそれでいながら、なお自分のうちには、主のみこころに反する異なった分子が潜んでいて、ただ主にだけ仕え、喜ばれたいと願えば願うほど、その度に失敗してしまうというジレンマに陥ります。「あれが罪だったのでしょうか。これが不従順だったのでしょうか」と思い巡らし、それを主に告白し、

勝利の生活に入ろうとしますが、祈って立ち上がるや否や、また失敗して敗北の生活に入ってしまう。

「主にこの身をおささげしたのは、完全でなかったのでしょうか。今改めて、再びこの身を主にささげましょう」と決心します。けれど、それもやはり無駄で、以前と変わりがありません。先に、司会の兄弟がお読みになりましたローマ書7章18節、19節にパウロが叫んでいるように私たちも叫ぶようになるまで、同じことを繰り返すのではないのでしょうか。7章18節からもう一度読みます。

ローマ人への手紙 7章18、19節

私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。

「…知っています」とは、経験したからです。このみことばは、信じる者だれもが経験する戦いなのではないのでしょうか。

ローマ書7章のおもな要点とは、前に話しましたように、「掟の支配からの解放」です。

三つの点に分けて考えたいと思います。

第一番目、掟は私たちにいったい何を教えるのでしょうか。

第二番目、掟の終わりである主イエス様。

第三番目、自分を見限ることの祝福。

この三つの点について、いっしょに考えたいと思います。

1. まず第一番目、掟は私たちにいったい何を教えているのでしょうか。

主の掟は、モーセの十戒にまとめられており、イエス様はそれを山上の垂訓で説明しておられます。さらに、主の掟をイエス様がまとめて一口で言われたみことばが、マタイ伝22章36節からではないのでしょうか。よく知られている箇所なのです。ある聖書学者が、イエス様のところへ行って質問したのです

マタイの福音書 22章36節から40節

「先生。律法の中で、たいせつな戒めはどれですか。」そこで、イエスは彼に言われた。『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』これがたいせつな第一の戒めです。『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです。律法全体と預言者とが、この二つの戒めにかかっているのです。」

私たちはあるものを測ろうとするときに、ものさしを使います。同じように、私たちは何が正しいか、何が悪いかを知るために、主の掟を用います。残念なことですが、こんにちの世界を見ると、善悪を測る尺度が人間の頭になってしまったことです。その結果、国々の間では争いがあり、また、人々の間にも不和と不一致があります。

何十年か前に、茨城県的那珂湊に住んでいた頃の事なのですが、あるとき近所の八百屋さんに新しく雇われてきた小僧さんは、私たちが買い物をしたとき、これは「だいたい」いくらです、と言って品物をくれました。普通の値段より安く見積もられると嬉しいですけど、だいたいに見積もられて、払ったお金の半分くらいしか品物をもらえなかったとしたら、ちょっと面白くありませんよね。

多くの人たちは、この「だいたい」という言葉で、物事を曖昧にしてしまうのではないのでしょうか。罪についても、「だいたいこれくらいならよいだろう」とごまかしてしまいます。人が善悪を判断するとき、いつも「だいたい」くらいの判断しかできません。

しかし、主なる神の場合は全く違います。この理由から主なる神は、人にはっきりしたはかりとして、掟を与えてくださったのです。「掟」は主なる神が、私たちが自らのまことの姿を見ることのできるように与えて下さった唯一の鏡のようなものです。すなわち掟によって罪が映し出されます。これこそ、パウロの経験でした。前に読みました箇所、もう一度戻りましょう。

ローマ人への手紙 7章7節

それでは、どういうことになりますか。律法は罪なのでしょう。絶対にそんなことはありません。ただ、律法によらないでは、私は罪を知ることがなかったでしょう。律法が、「むさぼってはならない。」と言わなかったら、私はむさぼりを知らなかったでしょう。

また、同じくローマ書3章の20節を読むと、次のように書かれています。

ローマ人への手紙 3章20節

なぜなら、律法を行なうことによっては、だれひとり神の前に義と認められないからです。律法によっては、かえって罪の意識が生じるのです。

私たちは、自ら進んでこの鏡の前に立つでしょうか。または、鏡の前から身を隠すのでしょうか。

ダビデは、自らの姿を映し出していただくために、あえて主の鏡の前に立ちました。彼は心から祈り、また叫んだのです。「神よ。どうか私を探って、わが心を知り、私を試みて、わが諸々の思いを知ってください。私に悪しき道があるかないかを見て、私をどこしえの道に導いてください」。このダビデのように鏡の前に立つには、何とかして真理を知りたいという飢え渴きがなければできない相談です。多くの人たちは、半分暗やみの中に入って、光に来ようとしません。裸のままの姿で主の前に立つことをしません。かつてイエス様は、光に来ようとしめない人たちを嘆いて、次のように言われましたが、こんにち多くの人たちは同じなのではないでしょうか。

ヨハネの福音書 3章19、20節

そのさばきというのは、こうである。光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。その行ないが悪かったからである。悪いことをする者は光を憎み、その行ないが明るみに出されることを恐れて、光のほうに来ない。

とあります。暗黒の中に住み続けたいと願うのは、本当に恐ろしいことです。このような人たちは、やがて主の御前に立たされる時、目が覚め、自らの滅びゆく様を見て恐れるでしょうが、その時はもうすでに遅すぎます。

例えば、癌の患者が医者忠告を聞かず、生活を享樂したいために好きなことをするなら、恐ろしい結果になってしまいますが、主の掟に耳を貸さない者は、なおさら恐ろしい結果になってしまいます。けれど、掟はいつも私たちの罪、私たちの咎を暴き立てます。掟の光に照らされると、自分は罪人で、咎ある人間だと叫ばなければなりません。

パウロはまた、掟について、律法について次のように書いたのです。ガラテヤ書3章の10節になります。

ガラテヤ人への手紙 3章10節

というのは、律法の行ないによる人々はすべて、のろいのもとにあるからです。こう書いてあります。「律法の書に書いてある、すべてのことを堅く守って実行しなければ、だれでもみな、のろわれる。」

とあります。

掟は、主なる神によって与えられたものですから、聖なるものであり、正しく、且つ、善なるものです。前に開いたローマ書7章の12節に、

ローマ人への手紙 7章12節

ですから、律法は聖なるものであり、戒めも聖であり、正しく、また良いものなのです。

とあります。掟そのものは良いのですが、掟を守らなければならない人間は、罪を犯し、守り得なくなっているのです。

例えば、東京の全市民に、二千円ずつの税金を課するという事は、正当な良い掟でしょう。けれど、僅か二十円しか持っていない人たちにとっては、この掟を守ることができません。また多くの人たちは、一見したところ大人しい、良い人のように見受けられますが、誰かに何かを命令されると、すぐに不機嫌になってしまう人もいます。小さな子どもたちを見ると、人はみな、「可愛い。可愛い」と言いますが、一たび何か気に入らないことを言われると、首を振って言うことを聞きません。私たちがこれと全く同じなのではないでしょうか。

私たちの生まれながらの性質は、罪です。掟はこの罪の性質があらわにされるために、主によって私たちに与えられました。すなわち、「偶像を拝むなかれ。姦淫するなかれ。偽証することなかれ。心を尽くし汝の神を愛せよ。次に、汝の隣人を己を愛するごとく愛せよ」。このように、私たちの罪の性質が表わされるため、掟が与えられているのです。何とかしてこの掟を守ろうとする人たちはみな、やがて自分が罪人であり、どうしても掟を全部行なうことができないということを知ることになります。

主なる神は、私たちが頭のとっぺんから足の先まで、罪に染まり、汚れ果てているとい

うことをよくご存じです。ところが、この醜い己の真相を、人間が知らないままであるということが問題なのです。己の真相を知るために、主は私たちに掟を与えてくださいました。主なる神は、私たちが掟を守ることができないことをもちろんよく知っておられながら、私たちに掟をお与えになりました。

実は、主は、私たちが掟を破るために掟をお与えになられたのです。掟は罪が増し加わるために与えられた、とローマ書5章20節に書かれています。

ローマ人への手紙 5章20節前半

律法がはいつて来たのは、違反が増し加わるためです。

パウロはこのことを体験しています。

ローマ人への手紙 7章7節

それでは、どういうことになりますか。律法は罪なのでしょうか。絶対にそんなことはありません。ただ、律法によらないでは、私は罪を知ることがなかったでしょう。

掟によって、私たちの本当の性質があらわにされます。そして、自分は徹底的に罪にまみれ、汚れ果て、このままではどうしても聖い主のみこころにかなうことができないということを示されます。私たちはみな、この段階に到達したのでしょうか。

今朝、ある夫婦とちょっと話し合いました。その結果は、二人とも一致したのです。「私たちは二人とも全然駄目です。もうどうしようもない者です。主が私たちを守ってくださらなければ、もうおしまいです」。ここまで成長した人たちは幸いなのではないのでしょうか。

・・・(テープA面切れ、B面に。)

必ずこの掟を人間は破ると知りながら、主なる神は、私たちに掟をお与えになられたのです。もし、私たちがどうしても掟を守ることができない無力さを徹底的に知らされたなら、掟の役目はそれで果たされたことになるのです。

「掟は、私たちを主イエス様に導く養育係である」とパウロは言ったのです。ガラテヤ書の3章を読むと、パウロは次のように書いたのです。

ガラテヤ人への手紙 3章24節

こうして、律法は私たちをキリストへ導くための私たちの養育係となりました。私たちが信仰によって義と認められるためなのです。

私たちは掟によってキリストに導かれる時、今まで守ることのできなかつた掟をイエス様が、「イエス様ご自身」が、守らせてくださるのです。

以上、掟は私たちに何を教えるかについて考えたのです。

2. 今度は第二番目になりますが、掟の終わりである主イエス様について、少し考えたいと思います。

ローマ書7章は、ローマ書6章14節の説明ではないでしょうか。すなわち、

ローマ人への手紙 6章14節

というのは、罪はあなたがたを支配することがないからです。なぜなら、あなたがたは律法の下にはなく、恵みの下にあるからです。

とあります。掟からの解放が問題です。解放とは、より高いものに結び付けられることです。束縛とは、低いものに結び付けられることです。

イエス様は、次のようにご自身を明らかになさったのです。

ヨハネの福音書 8章36節

「ですから、もし子があなたがたを自由にするなら、あなたがたはほんとうに自由なのです。」

イエス様にしっかりと結び付けられることは、まことの自由を得たことになります。恵みは、主が私たちに御子イエス様を与えてくださり、イエス様が私たちのうちに住んでおられ、掟（律法）を守らせてくださり、まことの自由を与えてくださったことに表われています。これに対して、掟（律法）は、私たちが主のために何かをする、掟（律法）を自分の力で守ろうと試みる、主に喜ばれようと努めるこの態度が、「掟（律法）にある態度」です。けれども、その結果はいったいどういうものなのでしょう。主のみこころを知り、それを行ないたいと願いますが、いつも失敗に終わってしまいます。

ローマ書6章では、「罪からの解放」について書いてあります。そして、例えば「主人」と「奴隷」が使われています。罪と罪人の関係は、結局、主人と奴隷の関係であると聖書は語っているのです。

けれど、ローマ書7章では、「掟からの解放」について語られています。そして例に、「夫」と「妻」が挙げられています。掟と罪人の関係は、夫と妻との関係です。これを少し考えてみたいと思います。

ローマ書7章2節、3節にありますように、一人の婦人と二人の男を喩えて言うなら、婦人は今、あまり好きでもない男と結婚しています。もう一人の男のほうを愛しています。けれど残念ながら、婦人は一人の夫しか持つことが許されていません。結婚している夫は別に悪い人ではありません。ただ、気が合わないだけです。夫は曖昧なことが嫌いです。この妻は何でも曖昧にしておきたいのです。このように、二人の物差しが違いますから、幸福に暮らすことができません。夫は非常に厳しいのです。いつも妻に、こうしなさい、ああしなさいと要求します。けれど、夫は夫として当然のことを言っているだけであって、別に間違ったことを妻に要求するわけではありません。悪いのは、妻が夫に聞き従わないことです。このようにしていくうちに、二人の間に食い違いが出来てきます。何とかして夫に従いたいとするのですが、出来ません。妻の言うこととすることは、原則としていつも間違いばかりだからです。妻は絶望してしまい、ほかの夫を求めます。ほかの意中の男は、今の夫と同じように曖昧を嫌い、厳しい人ですが、ただ一つ大きな違いは、妻に命令することは夫も妻を助けて一緒にやってくれるということです。何とかしてこの新しい人

と結婚したいのですが、残念ながら今の夫が生きているうちは出来ません。

パウロは、このことをローマ書7章で、掟と人の間を表わす例話を用いて語っているのです。

第一の夫は、主なる神の戒め、いわゆる掟であり、妻は何とかして主のみこころにかなおうと努めるのですができずに、ため息をついている私たちであり、第二の夫は、掟を私たちのうちにあって行なわせてくださるイエス様を表わしているのです。

掟は、私たちにいろいろなことを要求しますが、私たちを助けてくれません。しかし、イエス様は掟以上のことを要求されるお方ですが、私たちのうちに住んでおられ、ご自身で私たちを助け、要求を行なってくださいのお方です。

ですから、妻は今の夫と離れ、二番目の男といっしょになりたいと願うのです。妻の願いは、一日も早く今の夫が死んでしまうことです。夫が死なない限り、その結婚は決して解かれませんが、妻は、夫がまだ元気で一向に病気になるはず、死にそうもないのを悲しく思っています。(笑)

マタイ伝の5章。前に読んでいただきました箇所ですが、もう一度読んでみましょう。
マタイの福音書 5章18節

まことに、あなたがたに告げます。天地が滅びうせない限り、律法の中の一点一点でも決してすたれることはありません。全部が成就されます。

これを読むと、掟である第一の夫は決して死なない。永遠に生きていることが分かります。どうしても私たちは掟を守らなければならないことが分かります。では私たちはどうしたら第二の夫である主イエス様と一つになることができるのでしょうか。

前に読みましたローマ書7章1節から3節までを見ると、初めの夫が死んだら、第二の夫と結ばれてもよいと書かれています。4節には、夫の死ではなく妻の死、すなわち、私たちが死ぬことが書かれています。4節をもう一度読みましょう。

ローマ人への手紙 7章4節

私の兄弟たちよ。それと同じように、あなたがたも、キリストのからだによって、律法に対しては死んでいるのです。それは、あなたがたが他の人、すなわち死者の中からよみがえった方と結ばれて、神のために実を結ぶようになるためです。

掟は永遠にとどまります。けれど、もし私たちが掟に対して死ぬなら、掟から自由の身となることができます。どんな掟も、死んでしまえばその人の身に掟としての力を及ぼすことはできません。

第二次世界大戦の時、ドイツの空軍大臣であったヘルマン・ゲーリングは、終戦後死刑を宣告されましたが、執行される前に毒を飲んで死んでしまったのです。ゲーリングが死んだ時、死刑という判決は自然に消えてしまったわけです。同じように、主なる神の戒めから解放されるには、私たちが死にきらなければなりません。もし私たちが死ぬなら、第一の夫がどんなに命令しても、私たちには何の関わりもありません。

ここで問題なのは、それではどうしたら死ぬかということです。死に方がローマ書6章4節に書かれています。

ローマ人への手紙 6章4節

私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。

パウロは、コリント第一の手紙の中で、よく知られている箇所なのですが、次のように語ったのです。

コリント人への手紙・第一 1章30節

しかしあなたがたは、神によってキリスト・イエスのうちにあるのです。

「あなたがた恵みによって救われた一人一人は、神によってキリストのうちにあり」があります。主なる神は、私たちをキリストのうちに置き給いました。ですから、イエス様が死なれた時、私たちもともに死んだのです。それとともに、イエス様がよみがえられた時、私たちは主イエス様のうちにあつたので、ともによみがえらされたのです。

死によって、妻は第一の夫から解放され、第二の夫と結婚することができます。ですから、ローマ書7章4節にそのように書いてあります。

ローマ人への手紙 7章4節

私の兄弟たちよ。それと同じように、あなたがたも、キリストのからだによって、律法に対しては死んでいるのです。それは、あなたがたが他の人、すなわち死者の中からよみがえった方と結ばれて、神のために実を結ぶようになるためです。

「あなたがたが他の人のものとなるように」と書いてありますが、この「他の人」、すなわち主イエス様は、ご自分が命令したことを自ら成し遂げる力を持っておいでになります。

第二の夫と結婚した結果はどうでしょうか。それまでため息をつき、悩んでいた妻は、豊かに神のために実を結ぶようになります。妻のうちに宿った主イエス様のよみがえりの力、よみがえりのいのちは、神の実を結ぶ力です。妻はもう努力して掟を守り、主に仕え、主を喜ばせようとする必要はありません。うちに宿っておられる主イエス様ご自身が全てのことを成してくださるのです。そして、主のなさることこそ、いつも完全です。

もう一箇所。コリント第二の手紙の11章を読んでみましょう。

コリント人への手紙・第二 11章2節

というのも、私は神の熱心をもって、熱心にあなたがたのことを思っているからです。私はあなたがたを、清純な処女として、ひとりの人の花嫁に定め、キリストにささげることにしたからです。

乙女が結婚すると何が起こるのでしょうか。普通、夫の名前を名乗ります。それだけではなく、夫の持ち物も自分のものとなります。もし、私たちがキリストのものになると、同

じことが起こります。私たちはキリストの名を名乗り、主イエス様の持てる全てのものを自分のものとするようになるのです。

もし、主の持っておられる全てのものを持っているという確信に立つなら、主のご命令に従うことは簡単なことです。ヨハネ第一の手紙5章3節を読むと、次のように書かれています。

ヨハネの手紙・第一 5章3節

神を愛するとは、神の命令を守ることです。その命令は重荷とはなりません。

今まで二つのことについて考えました。掟とは何を教えているのか。第二番目。掟の終わりである主イエス様。

3. 最後に短く、三番目の点についてちょっとだけ考えたいと思います。すなわち、自分を見限ることの祝福についてです。霊的破産のもたらす祝福についてです。

ある兄弟が勝利の生活を願い、非常に悩み、ほかの兄弟に、「どうして自分はこんなに弱いのでしょうか。私はどんなに努めても勝利の生活に達することはできない」と漏らしました。相手の兄弟は言ったそうです。

「君が、主のみこころにかなう生活をしたいと願っていることは嬉しい。幸いです。そして、努力してもできないということを知るようになったことも感謝なことです。なおさらいいことです。けれど、君は弱いと言うが、まだ弱りきっていない。もし、本当に徹底的に弱くなりきるなら、少しも試みられないはずで、もし弱りきったら、君のなすことは初めから終わりまで、主だけが成してくださるでしょう」と。

私たちもみな、「自分は何もできない。全く弱い存在です。主よ。どうか私のために全てを成してください」という点にまで来なければならないのではないのでしょうか。

水に溺れる人を助けるとき、溺れている人が自分で暴れる元気があるうちは助けることができます。自分で動く力のある人を助けに行くと、助けに行った方も、しがみつかれていっしょに溺れてしまいます。けれど、弱りきったとき、全くもがく力が無くなったとき、簡単に助けることができます。

同じように、主は、夫を愛そうとしたあの妻のように、私たちが全く自ら努力することをやめ、霊的に破産するのを待っておられるのです。

私たちは、しばしば自分では主に仕える力があると考えます。そのようなとき、全く十字架の意味を知っていないことになります。十字架は、私たちに対する神の判決です。私たちには、十字架の刑が一番適しているのです。

主に喜ばれたいと願って自らする努力は、全く役に立ちません。ローマ書7章14節の、自分は肉につける者であるからです。18節に、

ローマ人への手紙 7章18節

私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。
私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。

また、次の8章8節に、
ローマ人への手紙 8章8節

肉にある者は神を喜ばせることができません。

前に話しましたようにローマ書7章1節から3節までの妻、7章15節から19節までのパウロは、主を喜ばせたいと願ってしたのですが、反対のことしかできなかったのです。このようなことを、私たちもすでに経験済みなのではないでしょうか。

私たちは主をお喜ばせたいと願っていますが、実際には、己（おのれ）、または人を喜ばせるためにしてしまいます。祈ろうとすれば眠くなり、聖書を読もうとすれば気が進まないといった状態なのではないでしょうか。

パウロがローマ書を書いたこの時代の殺人の罪に対する刑罰は、死ぬまで死人のからだを自分の身に背負って歩むという恐ろしい刑罰でした。パウロは自分自身、ちょうどこの恐ろしい刑罰を受けた者のようだとここで語っています。死人が自分のからだから離れず、自分はどのようにしても解放されそうもない。あわれな自らの姿を嘆いています。

パウロは、
ローマ人への手紙 7章24節

私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。

と叫んでいます。この主イエス様に向かっての叫びは、主のお喜びになる叫びです。これは、人のないうる最も霊的な叫びです。これは、人が全く自らを見限った時、霊的に破産した時初めて、心の底から出てくる叫びです。

私たちは、すでに自分自身に絶望したことがあるのでしょうか。それとも、祈ることにより、みことばがあることにより、より良いキリスト者になろうと努めているのでしょうか。

パウロは、いろいろなことが私たちを救うとは言っていません。ただイエス様だけが、救い得るお方であると言っています。

パウロは、以前には自分で事を解決しようと努めましたが、最後にそれが出来ないことを知り、自らの努力をやめたその途端、イエス様の祝福が注がれました。パウロはそのとき、ローマ書7章の25節で喜びの声をあげています。

ローマ人への手紙 7章25節前半

私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。

私たちはどのようにして罪の赦しをいただいたのでしょうか。祈りによってでしょうか。みことばを学ぶことによってでしょうか。また、ささげることによってでしょうか。

そうではありません。十字架を仰ぎ、イエス様がそこで私たちのために何をしてくださったかを知ったときなのではないでしょうか。

それでは、私たちはどうしたら掟から解放され、イエス様に喜ばれる生活をする事ができるのでしょうか。あれをやり、これをする。また、あれをやめ、これをやめることによってではなく、内住の主イエス様を心から信じ、感謝し、イエス様に全てを成していただくことによって、全き解放と、主に喜ばれる歩みをなすことができるのです。

罪の赦しは、イエス様が成してくださったことを単純に信じ、感謝することによりいただくことができますが、掟からの解放は、イエス様が今、私たちのうちに成してくださることを単純に信じ、感謝することによっていただくことができるのです。

最後に、一つのドイツの歌を紹介いたします。

かつて、私は聖き生活を送ることができないと思った。
なぜなら、自分の力で聖くなろうと努めていたから。
しかし、今は、主が私に聖きを与えてくださった。
主ご自身、私のうちに全てを成してくださる。

かつて、私は自分で親切になり、愛にあふれ、柔和であろうと努めた。
しかし、今は、主イエスが私のうちに住んでおられ、
私をご自分の御姿に変えようとしておられることを知った。

かつては、時々刻々、勝利の生活を送るとは夢にも思わなかった。
しかし、今は、主自ら私のうちに住んでおられ、
私の歩みを勝利に保たれることを知った。

かつて、私は主のうちにとどまり、主に喜ばれようと必死に努めた。
しかし、今は、私は主ご自身、私のうちにみわざを成されるままにしている。

このようにして、私は主にあり、主は私のうちにおられる。

了